

主 題：生きておられる救い主
 聖書箇所：ヨハネの福音書 11章25節

桜の花が終わり、新緑に移って行こうとしているこの季節、新しいいのちの芽生えを目にすると、私たちはそのすばらしさに感動を覚えます。心晴れやかにされ、造り主なる神を称えずにはおられません。マルティン・ルターは「復活の約束は書物の中だけにでなく春のすべての木の葉に書かれている」と言っています。新しいいのちを見るこのときだからこそ復活がふさわしいともいえます。

今日、私たちはこのイエス・キリストの復活について学んで行きましょう。

ヨハネの福音書11:25を見ましょう。「イエスは言われた。『わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。』」、これはイエスがマルタに言われたことばですが、25節の少し前からいきさつを見てみましょう。

ベタニヤに住んでいた三人の兄妹をイエスは愛しておられました。ベタニヤはエルサレムの東、3キロほどの所でしたが、兄妹のうちのラザロが重い病気にかかったとき、姉妹たちはイエスに使いを送り、すぐ来てくださるようにと願いました。しかし、イエスがそこに行かれたのはラザロがもう死んでしまって4日も経ってからでした。マルタはイエスに言います。11:21「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」と、悲しみの中、イエスがどうして来てくださらなかったのかと、マルタは失望の思いでこのように言ったのです。早くイエスに来ていただきたいと願っていたからです。19節を見ると、大ぜいのユダヤ人が来ていて、マルタとマリヤを慰めていたとあります。彼らは二人の姉妹を励ますために来ていたのです。このような時に、イエスは「あなたの兄弟はよみがえります。」と言われました。どうしてこのように言われたのでしょうか？イエスは、ラザロの死を通して、このときを通して、イエスはマルタとマリヤに、また大ぜいの人たちに、そして、私たちに大切なことを教えようと言われたからです。だから、わざわざ4日待たれたのです。ラザロが死んだことをすべての人が確実に認めるために、4日という期間を置かれたのです。

☆イエスが教えること

1. 人の死後について

23節に「あなたの兄弟はよみがえります。」とあります。まず、イエスは人々に、人は死んで終わるのではない、何かに生まれ変わるのでもない、すべての人は確実によみがえるのだと言われました。死んだ後、人はよみがえりの日を迎えるのです。24節はそれに対するマルタの答えです。「私は、終わりの日のよみがえりの時に、彼がよみがえることを知っております。」と、人は死んで後、必ずよみがえることをマルタはよく知っていました。これがまず、イエスが私たちに教えようと言われたことです。この地上の人生が終わったあと、人は必ずよみがえりの時があるのだと。

2. イエスはご自分がだれであることを教えられました

イエスは「わたしは、よみがえりです。いのちです。」と言われました。「わたしは、よみがえりでしょう、わたしはあなたがたにいのちを与えるでしょう」とは言っておられません。イエスはこれから起こること、これから自分が成すことを言っておられません。自分自身のこと、自分がどういう存在であるか明らかにされたのです。例えば、私が「私は罪人です」と言ったら、それは私自身のことを言っています。私は罪に染まっています、罪を犯すことが私の特性です、と「私は罪人です」と言うことによって、私自身がどのような者であることを表わすのです。

イエスが「わたしは、よみがえりです。」と言われたのは、イエスがどのようなお方かを表わしたのです。「よみがえりはわたしののです、わたしがよみがえりそのものです」ということです。わたしは自分もよみがえるし、人々をよみがえらせることもできる、それがわたしののだと言うのです。その力をもっているのだと。また、「いのちです。」も同じことです。わたし自身がいのちなのだ。ご自分がだれであることを明らかにするためにこのように言われたのです。だから、もう死の力はわたしを拘束しつづけることはないと言われます。そして「いのち」であるから、死の中に留まり続けない、必ずよみがえるのだと言われます。イエスがよみがえりであり、いのちであることを明らかにされたのです。

そして、「わたしは救い主である」ことをイエスはここでマルタに明らかにされました。どうしてそれが分かるでしょう？27節にマルタがイエスにこのように言っています。「私は、あなたが世に来られ

る神の子キリストである、と信じております。」と。「キリスト」とはメシヤ、救世主という意味です。マルタはイエスがだれであるかを知っていたのです。これはマルタの信仰告白です。マルタはイエスを主、救い主と信じていたから、このように言ったのです。これはイエスご自身がご自分のことをそのように主張して来られたことです。

イエスが「わたしは、よみがえりです。いのちです。」と言われたことには、イエスご自身の考えがあったのです。この順序には目的があったのです。まず私たち一人一人が「死んでいる」ことを覚えるためなのです。死んでいるからよみがえることが必要なのです。いのちを得るためにはよみがえらなければならないのです。何を言っているのでしょうか？

私たちは肉体は生きていても霊的には死んだ者でした。アダムとエバの罪によって彼らは神との交わりが断たれたために、人間は生まれながらに罪の中にあります。神が約束された祝福もなく霊的に死んだ者として生まれて来るのです。エペソ 2:1 には「あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、」とあります。また、イエスはユダヤ人の指導者であるニコデモに対してこのように言われました。ヨハネ 3:3 「人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」と。永遠のいのちを得るためには、まず、よみがえらなければならないのです。そして、いのちをいただくのです。

では、どうすれば、いのちを得ることができるのでしょうか？25 節「…わたしを信じる者は、」、26 節にも「…わたしを信じる者は、」とあります。イエスを信じることによって得られるのです。「信じる」とは、自分のまちがいを認めて正しく歩み始めることです。「信じる者」と言われているのは、信仰が個人的なものであることを示しています。そして、信じる者は「死んでも生きるのです。」と、この「生きる」は現在形ですから、「生き続けていく」と継続を現わします。イエス・キリストを信じる者は永遠のいのちが与えられることを、この 25, 26 節でイエスははっきり言われているのです。

旧約聖書のダニエル書の中にこのように書かれています。12:2 「地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者が目をさます。ある者は永遠のいのちに、ある者はそしりと永遠の忌みに。」また、ヨハネ 3:36 「御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることなく、神の怒りがその上にとどまる。」と、信じる者と信じない者とのちがいははっきりと示されています。イエス・キリストの十字架の死と三日後のよみがえりは歴史上の事実です。そして、これこそが、クリスチャンの信仰の土台です。私たちの信仰は、今も生きておられる救い主イエス・キリストに拠っているのです。だから、クリスチャンは週の初めの日、すなわち日曜日に、主の復活を記念してともに礼拝を捧げるのです。

救われた私たちの責任、それは、この救いのメッセージを伝えて行くことです。I コリント 15:12-20 にはそのことが書かれています。「ところで、キリストは死者の中から復活された、と宣べ伝えられているのなら、どうして、あなたがたの中に、死者の復活はない、と言っている人がいるのですか。もし、死者の復活がないのなら、キリストも復活されなかったでしょう。そして、キリストが復活されなかったのなら、私たちの宣教は実質のないものになり、あなたがたの信仰も実質のないものになるのです。それどころか、私たちは神について偽証をした者ということになります。なぜなら、もしもかりに、死者の復活はないとしたら、神はキリストをよみがえらせなかったはずですが、私たちは神がキリストをよみがえらせた、と言って神に逆らう証言をしたからです。もし、死者がよみがえらないのなら、キリストもよみがえらなかつたでしょう。そして、もしキリストがよみがえらなかつたのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお、自分の罪の中にいるのです。そうだったら、キリストにあって眠った者たちは、滅んでしまったのです。もし、私たちがこの世にあってキリストに単なる希望を置いているだけなら、私たちは、すべての人の中で一番哀れな者です。しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。」

私たちはまちがいなくよみがえるのです。イエスの復活が事実だから、それがすべてを明らかにしているのです。この後の 15:57, 58 「しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主においてむだでないことを知っているのですから。」。私たちの労苦は主においてむだではないのだと言われるのです。

私たちは生きる神に仕える者なのです。